

平成 22 年 6 月 29 日

レポート：暮らしの中の証券市場

「株式市場の仕組み I」

株価を動かす要因はさまざまですが、中でも「景気」「為替」「金利」が与える影響が大きいと思われます。そこで株価とこれら 3 つの要因との関係について

株価はさまざまな要因が複合的に影響しあうことで変動します。本来は、収益力や財務内容など企業の投資価値と株価は一致すべきなのですが、現実の株式市場ではなかなかそうはいきません。しかし一般的には個別企業の業績の良し悪しが株価に影響することが基本です。

まず「景気」が株価に与える影響についてですが、個別の企業の業績が景気に左右されることは否定できません。好景気は企業活動を活性化させ、企業収益も増益となり、その影響が株式市場に波及し、それがまた企業活動へ反映されるという好循環が続きます。逆に不況になると悪循環となり、脱出するきっかけを模索するようになります。なお景気の変動に行き過ぎが起こる恐れがある場合、政府や日本銀行を中心にさまざまな景気対策が取られます。このように景気がよくなれば企業の業績は上向きですし、悪くなれば業績に悪影響が出てきます。株式市場全体は景気と密接に関連しているといえます。

次に「為替」についてですが、一般に円安は円での販売額が増加する輸出企業にメリットがあり、円高は円での支払額が減少する電力・ガスなど原材料を輸入している企業にメリットをもたらします。いずれにしても急速な為替の変動は株式市場のみならず経済に及ぼす影響も大きいため、各国政府は市場に介入して急激な変動を抑えようとすることもあります。最近の傾向では、円高は株価下落の方向に、円安は株価上昇の方向に振れることが多いようです。これは全体的には円高のメリットよりも、円安のメリットの方が企業にとっては大きいと株式市場が見ているためといえるのではないのでしょうか。

最後に「金利」についてですが、とりわけ金融市場の実際の資金需要により変動する「市場金利」は、現実の景気実態を反映したものとして注目されます。一般的には、金利低下は企業の金利負担が減少して、企業業績が向上するとともに、債券などから株式へ資金がシフトして株価上昇の要因となります。また金利上昇は企業の金利負担が増加して、企業業績が悪化するとともに、株式から債券などへ資金がシフトして株価下落の要因となります。しかし現在のような低金利が続いている状況の下では、ある程度の金利上昇があっても、中長期的には、株価下落の影響は限定的ではないかと考えられます。

参考資料：

日本証券業協会証券教育広報センター「株式投資の基礎知識」（2009 年）